特別史跡安土城跡の調査から(1)下

(2)　伝前田利家邸跡

A区

伝前田利家邸跡の最上段にあります東西約30m、南北約15mの郭です。大手道とは石土居で遮断され、南と北は石垣を積んでいますので、出入口は東側に求められます。山手の石垣は高さ約5m、長さ約28mを測りますが、今は東側約14mのみ遺存し、石土居までは2段に分かれた石垣の痕跡がみられます。石垣の中央付近に石組階段を取り付けています。

一面で積み上げられた東側の石垣裾に礎石7個が約1.95m間隔に並びます。石垣にそって桟敷状施設をつくっていた可能性があり、西側の段上を武者走りとして桟敷状施設とつなげて、石組階段から上り降りしていたと考えられます。

郭内からは池状遺構以外に建物などは検出されませんが、池状遺構は時代を限定することはできません。

B区

A区より約2m低く造成された東西約25m、南北約5mの細長い郭です。大手道側に1辺約5m四方の低い区画をもち、そこからC区へつながる幅約1mの通路がのびています。上段は石垣にそって礎石4個が約1.95m間隔に並び、谷側に対応する礎石が1個あることから、細長い建物が存在したとみられます。

この郭も大手道側は石土居で遮断され、東側の広い郭に続いています。なお、大手道側の区画は武者溜りと考えられます。

C区

B区の東半分から南側へ舌状にのびる郭で、B区より約1m低く造成しています。建物などは検出されず、B区と通路でつながっていることなどから下のD区を守る郭といえます。

伝徳川家康邸跡　A区　石組階段

D区

伝前田利家邸跡の最下段にあたり、伝羽柴秀吉邸櫓門跡とは向い合います。東西約14m、南北約17mの規模をもち、石土居はここで途切れ桝形を形成します。

郭内からは建物は検出されませんが、伝前田利家邸跡で唯一大手道に開口することから正面の入口といえます。

(3)　伝徳川家康邸跡

伝徳川家康邸跡は安土山南面山腹に所在します現在の摠見寺付近をいいます。元の摠見寺は安土山西側の百々橋から登りきった所にありましたが、安政元年（1855）に落雷を受け、二王門と三重塔を残し焼失したために現在の所に再建されました。

屋敷地は摠見寺再建に伴い地形は大きく改変され、上下2段に分かれます。下段に本堂と鐘楼はあります。調査は鐘楼の西側と北側で行いました。

A区

上段にある東西約35m、南北約15mの郭で、

郭の東半分を調査しました。北東隅に門を構え、門を入ると6段の降る石段と降りきったところに石組溝を設けています。

郭内から3間×3間（3.5m×3m）以上の礎石建物と東側斜面にそって並ぶ礎石3個を検出しました。また、礎石建物の西側からは灯籠の台座と平瓦も検出しました。門から山手には道にそって石土居を築いています。

B区

下段を示し、鐘楼の西側と北側にトレンチを入れました。西側トレンチからはA区へつながる石垣の基底部を2列検出しました。石垣の間隔は約3mあり、2段の石垣が積まれていたようです。北側トレンチからは大手道にそってのびる石土居の基底部を検出しました。この石土居は伝羽柴秀吉邸跡の石土居の延長線上にあたり、B区を東西に2分するように、大手道がここを南北に通っていたことが判明しました。

このことから、B区の西側は南北約25m、東西は北側約8m、南側約20mの郭であることが明らかとなりました。

(4) 大手道

安土城の正面である大手は安土山の南側にあります。「近江国蒲生郡安土古城図」には東西に走る下街道（のちの朝鮮人街道、現在の県道大津能登川長浜線）から分かれ、沼（内堀）を通り、山腹まで直進し左へ折れ、摠見寺からの道と合流して、黒金門へは南から入っています。なお、内堀の一角には左右にのびる土塁と「門」（と記入）が書かれており、大手門の存在を明らかにする手懸りになっています。

大手道　東から

現在、山裾から黒金門へいたる階段は昭和6年に改修されたもので、山裾から約50mは大手道の上に造られています。

調査の結果、山裾から約106m（斜延長約109m）直進して、西へ直角に折れ、約30mいったところで山側へゆるく曲り登っていることがわかりました。その延長線上に伝武井夕庵邸跡があります。

山裾から約106m先までは道幅8～9mを測り、比高差は約30mあり、約18度の勾配をもちます。西側に幅1～1.4mの側溝を備え、各郭とは石土居で遮断しています。側溝の底部は石敷で所々に段を設け、縁石に石佛を転用しています。階段はほぼ等間隔に設けています。

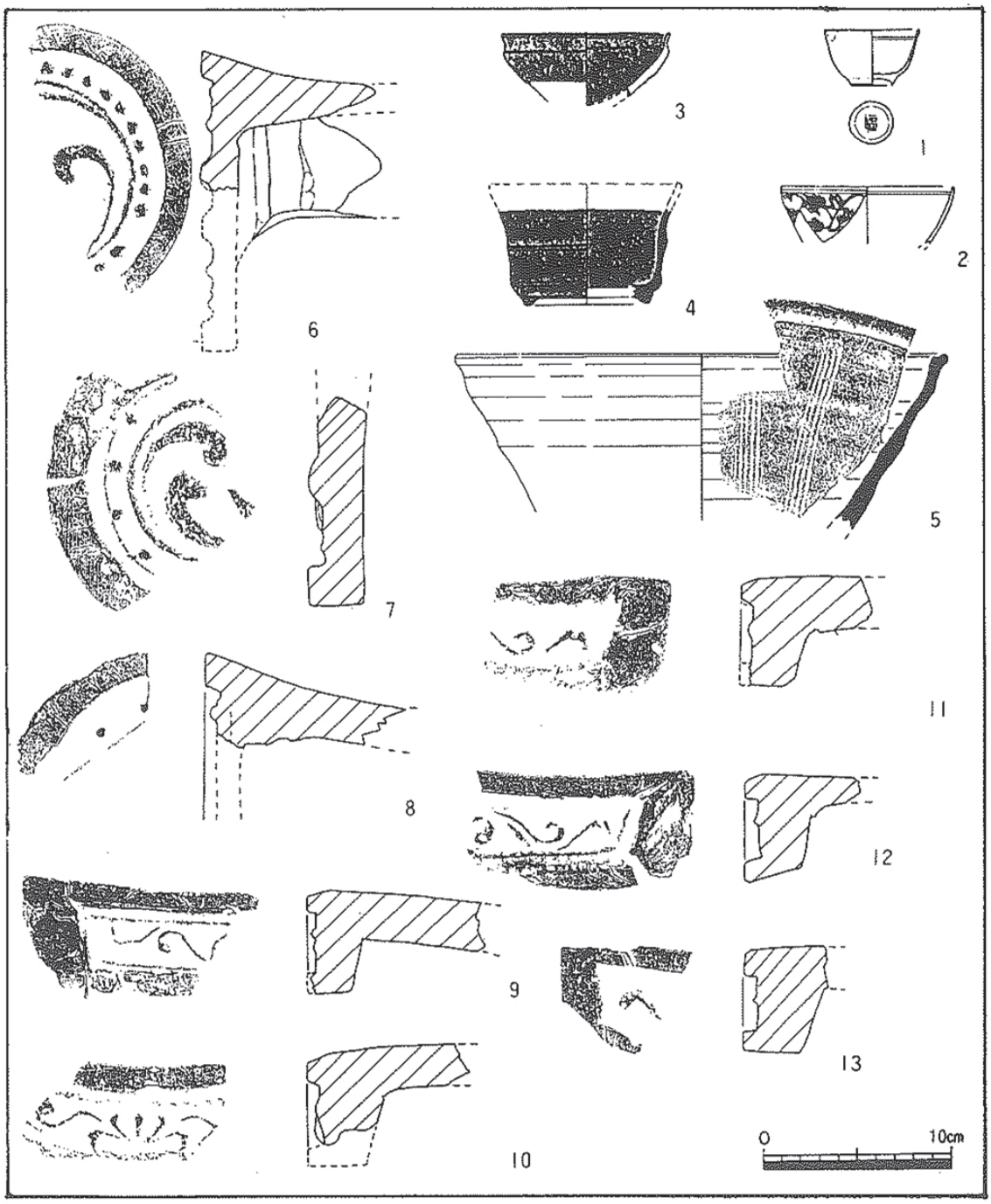
山腹から西へのびる部分は、谷側が削平されていますが道幅は約5mあったと推定されます。勾配は約10度で比較的緩やかになり、階段を0.7～3m間隔に約20段設けています。山側は幅約0.9mの側溝を備え、ここでも縁石の一部に石佛を転用しています。溝底は部分的に石を敷いていますが、東側は岩盤を掘り込んで溝にしています。山側の斜面は谷のあたるところに石垣を積んでいます。この付近から金箔瓦を含む瓦が多量に出土しています。

道はさらに山側へ曲がり登っていきますが、その谷側に伝徳川家康邸跡A区の門があります。なお、屈曲する道路上に江戸時代のものとみられる炭窯があります。

(5) 出土遺物

出土品には須恵器、土師器、陶磁器、瓦、鉄製品、石製品などがあり、時期的には古墳時代から江戸時代に及びます。

安土城に関係するものは瀬戸・美濃焼き天目茶碗、中国製磁器白磁皿・染付碗・染付皿、常滑焼き・信楽焼き甕・擂鉢、土師器皿、香炉などと金箔瓦（金泥瓦も含む可能性があ



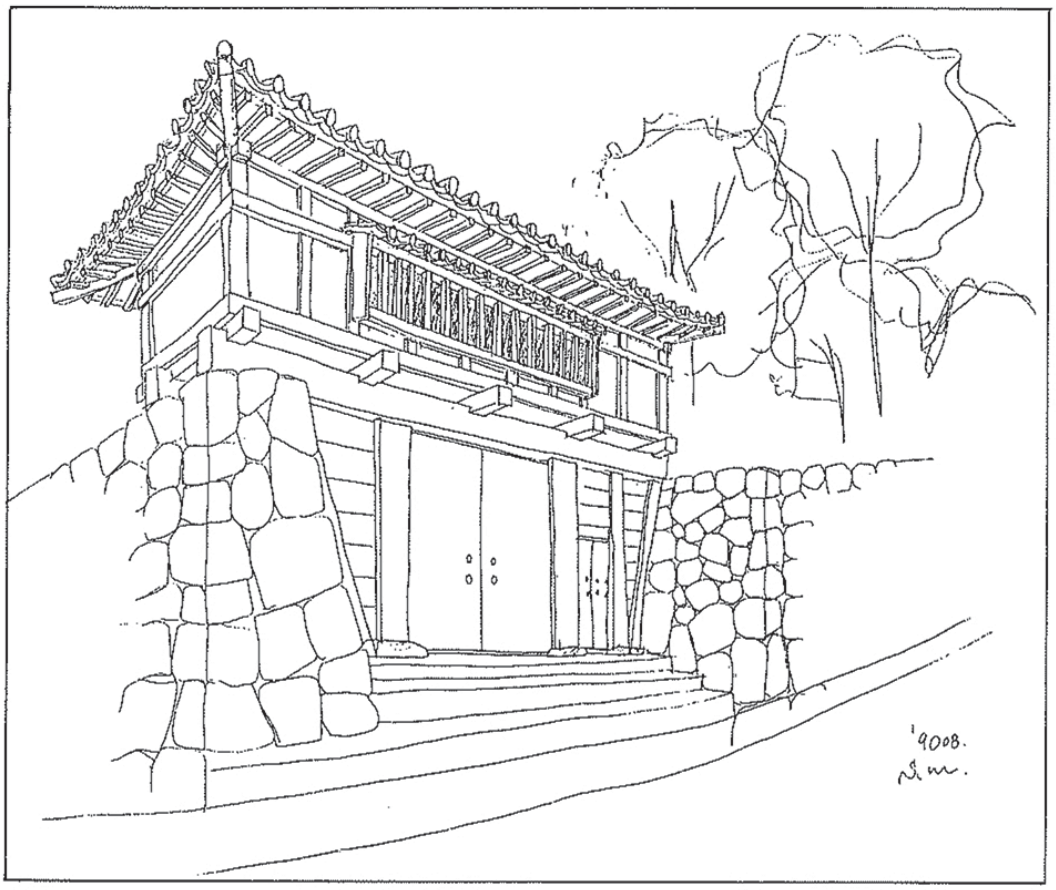
出土遺物（『特別史跡安土城跡発掘調査報告』1 から）

1 染付杯　2 染付碗　3 天目茶碗　4 香炉　5 摺鉢　6・7 軒丸瓦
8 ～13金箔瓦（伝羽柴邸跡 D 地区出土：8 軒丸瓦　9 ～13軒平瓦）

る。）をはじめとする軒丸・軒平瓦、平瓦、丸瓦などがあります。出土量は多くはありません。

金箔瓦はこれまで天主付近からしか出土しないといわれていましたが、天主以外の建物にも用いられていたことが明らかになりました。大手道にそった主要な建物に葺かれていたとすれば、光を受けたその姿は荘厳であったことと想像されます。

石製品では石佛、砥石、石弾状製品などがあります。石佛は側溝や石垣に転用されて出土する方が多く、転用方法は裏面を表にして、それもあまり目につきにくい所に使用しています。将軍足利義昭のために築城した二条城ほどではありませんが、この安土城でも石材の不足を補いながらも、使用方法、場所に配慮していたことがうかがえます。



櫓門復元想定図（奈良国立文化財研究所主任研究官 松本修自作図）

安土城跡の石垣はいわゆる湖東流紋岩といわれている地元の石を主に用いています。表面はあまり整形せず、中には丸味のある石をまん中で二つに割り、割れ面を表にして積んでいます。隙間は小さな割石で詰めて、裏込には石片屑を使用しています。積み方はあまり規則正しく積まず、石垣の基底部は地山に直接石を置いています。岩盤に段をつくり置いているところもありますが、今後、穴太積みとの関係も調べていく必要があります。

櫓門については、現存する中では文禄年間（1592～1596）の福山城や慶長年間（1596～1615）の姫路城が古く、絵図では天正年間後半の様子を描いた「聚楽第図屏風」や「肥前名護屋城図屏風」に櫓門をみることができます。しかし、伝羽柴秀吉邸跡の櫓門跡はそれらより古く、規模は近世城郭の大手門に匹敵するといえます。

信長は築城にあたり、信長および主な家臣の屋敷地の曲輪に「矢蔵門」を建てるよう命じています。今回の調査でそれが実践されていたことが裏付けられ、これ以降の城は天主も含めて、安土城をモデルにしていたことが実証されました。

大手道は両側に側溝を備えた幅約８ｍにおよぶ大規模で、それも約106ｍも直線的にのび、城のシンボルとして他に比類なき壮大なものであることが明らかになりました。

なお、安土城の炎上については蒲生賢秀ら留守衆の放火説、明智光秀・秀満の放火説、織田信雄の放火説があり、全山焼け落ちたともいわれています。しかし、平成元年度・２年度の屋敷地などの調査では火災の痕跡は確認されません。摠見寺が焼けずに残っているように、火災の範囲は限られていたとみられ、今後、火災の範囲も調査によって明らかになると思われます。

（葛野　泰樹氏　提供）